なくおきちらしたるさまの、くもでに似たればよそえてよめるにや、

〔和歌童蒙抄五橋〕クモデトハ、柱ニチガヘテユルガサジト、ウチタル木ヲ云也、サレド此八橋ハ、タダ板ヲ打タルヤウニテアルナレバ、蜘蛛ノ手ハヤツアレバ、ヤツトイヘル心ニツキテヨメルナリ、

〔倭訓栞前編八久〕くもで　蜘手と書り、伊勢物語に三河の國八橋の事に、水ゆく河のくもでなればといへるは、水の蜘手のやうに流れ行なり、されば眞名本には水堰河とあれば、みづせくかはとよむべし、ゐせぎ川なるをもて蜘手にわかれたるなるべし後撰集に、

打渡し長き心は八橋の蜘手におもふことは絶せじ、橋にいふは簍(ワク)の如き物の上に橋かくるをいふ、其組ちがへたる形の蜘の手に似たるなり、俊頼家集に、

並立る松の玄づえをくもでにて霞渡れる天のはし立、一説に八橋の蜘手とつゞくるは、蜘の手は數八あるによりてなりといへり、

〔蜻蛉日記下之下〕まつりの日、いかゞは見ざらんとていでたれば、○藤原通綱母、中略、さてすけにかくてやなどさかしらがる人のありて、ものいひつゞく人あり、やつはしの程にやありけん、はじめて、

かつらぎやかみよの玄るしふかゝらばたゞひとことにうちもとけなん、かへりごとたゞひはなめり、

かへるさのくもではいづこやつはしのふみ見てけんとたのむかひなく、こたびぞかへりごと、

かよふべきみちにもあらぬやつはしのふみ見てきとてなにたのむらん

〔更科日記〕井のはなといふさかの、えもいはれずわびしきをのぼりぬれば、三河の國の高師の山といふ、八はしはなのみして、橋のかたもなく、なにの見所もなし、